

Title	Feature Relations in Natural Language Syntax
Author(s)	田中, 裕幸
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47098
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	田中裕幸
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第20589号
学位授与年月日	平成18年5月9日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	Feature Relations in Natural Language Syntax (自然言語統語論における素性関係)
論文審査委員	(主査) 教授 大庭 幸男 (副査) 教授 金水 敏 助教授 岡田 禎之

論文内容の要旨

本論文は、語彙項目の形式素性を最も基本的な要素であると仮定した上で、今までとは異なる新しい自然言語統語論の計算機構(CHL)を構築することを目的とし、生成文法理論のミニマリスト・プログラムのCHLシステムに理論的な貢献をしようとするものである。本論文は英語で書かれたもので、全6章から構成されており、総頁数はA4判ix+282頁である。

最近の生成文法における統語理論においては、統語派生に関わる語彙項目の形式素性が重要な役割を果たしている。統語論は言語表現が個々の語彙項目からいかにして形成されるかに関する理論であり、また、形式素性間の関係が言語表現の構造を決定する主要な要因であることが明らかになっている。したがって、現在は素性とその間に成り立つ関係が最も基本的なものであるということを前提にした上で、通常の言語分析において抽象的なレベルで語られているCHLのシステムがこれらの素性関係に基づきいかに形式化されるかを検討し、それによってCHLについての理解を深めようとするのに適切な時期に差しかかっている。

この目標に向けて、第2章では完全に素性指向型の理論、つまり素性が基本的な要素であると見なし、素性とその間の関係に対してのみ操作が適用されるとする形式理論(Feature Relational Syntax; FRS)の構築を試みる。そのシステムは素性とその関係のみをCHLの対象とするので、従来考えられてきた構成素に対応する理論的構築物は必要なくなる。構成素と見なされてきたものは全てPF/LFのインターフェイスが統語論の出力から読み取った結果に過ぎないことになる。第3章以降では、第2章で構築した理論の形式的特性から得られる帰結をもとに言語分析を行う。まず第3章では、素性の随伴が最小性の条件に従うか否かについての問題を考察する。FRSを仮定すれば随伴は最小性条件に従わないことが予測され、この予測の正しさはA/A'両システムの相互干渉において格・一致が規範的な現れ方から逸脱しているように見える現象の存在によって確かめられる。

第4章では、補文標識Cの素性構成がどのようなものか、そしてCおよびCPの統語・形態・意味に関する特定の仮定を認めた場合にどのような事が言えるかという、より実質的な問題を扱う。具体的には、CPの ϕ 素性の性質(解釈可能性)とCPの意味的性質($\pm Q$)とが相関していると考えることでCP全体の統語的性質と意味的性質の相関を把握することができること、また、Cが ϕ 素性を持っていると仮定することにより、主語抽出に関わる言語現象は一般的な形態統語的な条件の適用結果であると分析できることを示す。

最後に第5章では、CHLの循環的特性に焦点を当てている。第2章では、素性関係の条件を満たす操作が語彙項

目ごとに循環的に適用されるような派生の定義を行ったが、実際にこのような循環性が（計算量を軽減するという理論的理由だけでなく）経験的にも必要であることを示す。この種の循環性を措定しなければ、存在しない日本語の格付与のパターンを過剰生成してしまうことを指摘する。そして、第6章は本論文の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文では、語彙項目の素性関係を中心とする統語理論の構築が試みられている。この理論では、従来のミニマリスト・プログラムにある統語操作 **Merge, Move** を排除し、素性間の関係に対して適用される **Select, Agree** のみを仮定している。その結果として得られた関係はワークスペースに蓄えられ、**PF** インターフェイスでは文の語順が、そして、**LF** インターフェイスでは文の意味がアルゴリズムによって算出される。この理論の概念的な利点は「構成素」という理論的な構築物を排除しうることである。これは、不必要な道具立てを極力用いずに統語理論を構築するというミニマリスト・プログラムの方針に合致している。また、この理論の経験上の正当性は、素性随伴の最小性（第3章）、補文標識の文法素性（第4章）、**Agree** の循環適用（第5章）に関して、豊富な言語事象をあげて緻密にかつ説得的に示されている。このように、本論文は語彙項目の素性を最も基本的な要素として捉え、これらの操作やその適用条件を集合論的に規定し、心的表示の経済性を極限にまで突き詰めようとする極めて大胆で意欲的な試みであり、その試みの中で組み立てられた精緻な理論は大いに評価できる。

本論文の中核部分は国際学術専門誌 (*Lingua* (2003), *Linguistic Analysis* (2005)) にすでに発表された論文を修正、加筆したものである。したがって、本論文は極めて高い水準にあり、生成文法の理論的システムの構築に大いに貢献するもので、今後、統語論研究に大きな一石を投ずるものと考えられる。

以上のような本論文の優れた成果にもかかわらず、問題点がまったくないわけではない。まず、素性随伴が最小性によって制限を受けないと主張するが、逆に最小性に制限されるとする立場の議論がそれほど多く提示されていないので、本論文の主張を強化するためには、この反対の立場の議論をさらに吟味すべきであろう。また、筆者が文法的と判断している文でも、多少違和感があり本当に文法的かどうか明らかではないものがいくつか認められるので、理論を支える言語データに慎重な取り扱いが求められる。また、本論文は語彙項目の形式素性のみを用い、構造は不要であると主張するが、概念規定や現象説明には構造に基づいた用語が用いられており、本論文の素性基盤モデルがこれまでの構造基盤モデルと比べて実質的な違いがないかのような印象を与えてしまう部分があり、筆者の意図するシステムの内容を正確に伝えるためにはもう少し説明に工夫が必要であろう。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。